

進化する「AO型入試」

高大接続答申における「多面的・総合的な評価」の特徴



西郡 大 佐賀大学アドミッションセンター 准教授

東北大学大学院教育情報学教育部博士課程修了。博士(教育情報学)。早稲田大学教育学部卒業後、民間企業を経て、東北大学大学院へ進学。日本学術振興会特別研究員を経て、2009年より佐賀大学アドミッションセンター准教授として勤務。2012年より同大学インスティテューショナル・リサーチ室長を兼務。専門は、入学者選抜方法論。

国立大学法人では来年度から始まる第3期中期目標・計画の策定が大詰めを迎えている。同目標・計画には、「入学者選抜の改善に関する目標」が新たに項目として加わった。もちろん、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体改革について(答申)」(2014年12月22日)(以下、「高大接続答申」とする)が反映された結果である。本稿では、国公私立を問わず各大学が直面している「多面的・総合的な評価」を個別選抜改革としてどのように考えていくかを整理したい。なお、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」については、技術的な課題や測定領域など高大接続システム改革会議において慎重な議論が行われているため、その点には触れないことにする。

多面的・総合的な評価を重視する考え方は、特に新しいものではない。臨時教育審議会第一次答申(1985年)において、入試の多様化、評価の多元化が推進されたのち、「新しい時代に対応する教育諸制度の改革について(答申)」(1991年)に引き継がれ、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第二次答申)」(1997年)で「総合的かつ多面的な評価など丁寧な選抜」という現在とほぼ同じ表現になった。1990年代中頃までは、「過度の受験競争の緩和」が1つの主旨であったが、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」(1999年)において、大学全入時代の到来を踏まえた「大学と学生とのより良い相互選択」という考え方と、「入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)」という新たな概念とともに評価尺度の多元化が推

進されたのは1つの転換点であった。その後、「学士課程教育構築に向けて(答申)」(2008年)、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」(2012年)へと引き継がれ高大接続答申にいたる。

高大接続答申では、小・中学校で積み上げられてきた「確かな学力」と「生きる力」を高等学校、大学教育において確実に発展させていくために、多面的・総合的な評価を中心とした入試に転換していくことを求めている。その最も大きな特徴は、「知識・技能」、「思考力、判断力、表現力」、「主体性・多様性・協働性」で構成される「学力の3要素」という具体的な評価対象が示された点であろう。これは、学校教育法第30条第2項で定められている「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度」における「主体的に学習に取り組む態度」を「主体性・多様性・協働性」に置き換えたものである。この学力の3要素の出現により、「受験生の能力・適性等を多面的に評価する」から、「学力の3要素を踏まえた多面的な評価」という表現に変わった。文部科学省が各機関に毎年通知する「大学入学者選抜実施要項」でも2016年度より、「能力・意欲・適性等の判定に当たっては、学力を構成する特に重要な以下の三つの要素のそれぞれを適切に把握するよう十分留意する」という文言が加わっている。つまり、各大学における個別選抜改革にとって、この「学力の3要素」を意識した多面的・総合的な評価を検討することが大きなポイントとなる。

AO入試の拡大

典型的な多面的・総合的な選抜方法としてアドミッション・オフィス入試(以下、「AO入試」とする)について整理しておきたい。わが国初のAO入試は、1990年に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)が実施したものであることはよく知られている。偏差値等の単一の尺度では測りきれないような多様な面で特徴があり、やる気のある者を選ぶことを目的として、書類選考と面接による方式で始まった。その後、私立大学を中心にAO入試を導入する大学が出現し、約10年をかけて13大学となった。ところが、2000年になると一気に75大学に急増。東北大学、筑波大学、九州大学といった国立大学でも導入され「AO入試元年」と呼ばれた。

最近では一般的になったAO入試であるが、当初は明確な定義があったわけではない。2000年の「大学入試の改善について(答申)」では「『アドミッション・オフィス入試』とは、アドミッション・オフィスなる機関が行う入試というよりは、学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間を掛けた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲・目的意識等を総合的に判定しようとするきめ細かな選抜方法の一つとして受け止められている」と表現されている。前述の「大学入学者選抜実施要項」に明記されたのは2002年度からであり、「詳細な書類審査と時間を掛けた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲・目的意識等を総合的に判定する方法(アドミッション・オフィス入試)」と現在とほぼ同じ定義になった。ところで、AO入試は推薦入試と混同されることが多い。図表1にAO入試と推薦入試の一般的な違いを整理する。AO入試は推薦入試よりも制限が少なく、大学の裁量に任されているところが大きい。特に、黎明期には、AO入試において入学願書の受付開始時期の制限がなかった

ため、学生募集に熱心な大学にとっては魅力的な入試と受けとめられ急速に拡大していった背景がある(図表2)。

AO入試での入学者は、優れたパフォーマンスを発揮しており、優秀な学生が獲得できる入試であると評価する大学がある一方で、近年では、一部のAO入試においては事実上の「学力不問」の入試となるなど、本来の趣旨とは異なる運用になっているという指摘もある。2011年度の「大学入学者選抜実施要項」より、基礎学力の把握に関する文言が加わったことは記憶に新しい。このようにAO入試に対する様々な評価がある中で、同入試を検討する大学は、その本来の趣旨を再確認し、どのように位置づけるべきかを問われている。

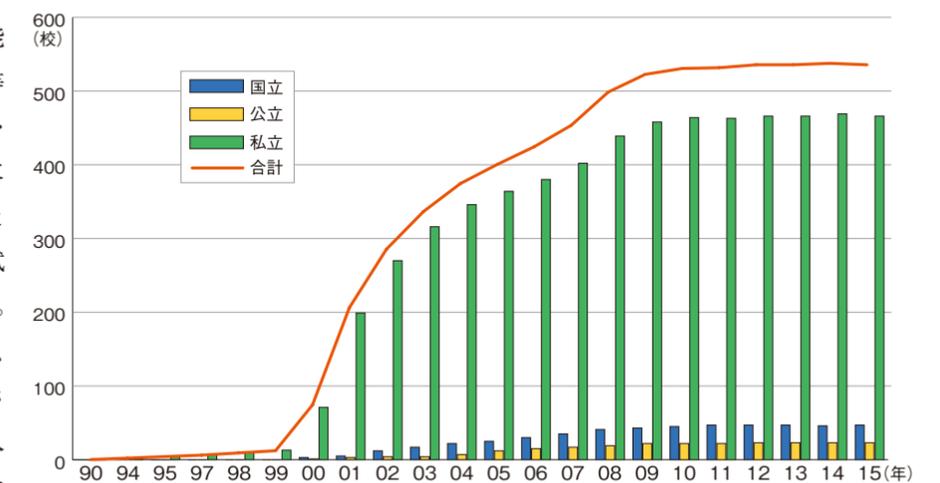
ここまで多面的・総合的な選抜方法の代表例としてAO入試について触れたが、高大接続答申は、AO入試という特定の選抜区分の拡大を推進しているわけではない。現に、「一般入試、推薦入試、AO入試の区分を廃止した新たなルールを構築」(「高大接続改革実行プラン」(2015年1月16日))として、選抜区分の意識よりも「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する方法を積極的に取り入れることを求めている。こうした点を踏まえ、「多面的・総合的な評価」を実現するう

図表1 AO入試と推薦入試の一般的な違い

項目	AO入試	推薦入試
高校長からの推薦	不要(公募制)	必要
募集人員の制限	制限なし	入学定員の5割を超えない範囲で各大学が定める ^{*1}
入学願書受付開始時期	8月1日以降 ^{*2}	11月1日以降

*1 2000年度入試から3割から5割に変更された。なお、国立大学協会では、「AO入試+推薦」の募集人員が入学定員の5割を超えないことを実施要項に定めている。
*2 高等学校における教育への影響に配慮するため、2011年度入試より始期を設定した。

図表2 AO入試実施大学数の変化



えて、その軸となるアドミッション・ポリシー(以下、「AP」とする)について、入試改革を担う現場の視点から考察したい。

「形式的なAP」から「実質的なAP」への転換

① 「形式的なAP」とは何か

前述したようにアドミッション・ポリシーという用語が初めて登場したのは、1999年の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」である。その中で受験生に求める能力・適性等の例示が示された(図表3)。多くの大学は、この表現を参考にそれぞれのAPを定めていったと思われる。そのため、各大学で定める「求める学生像」は、実際の受験生像とはかけ離れた「理想型AP」になっていることが多い。仮に、実際の入試において受験生全員が「求める学生像」に全く合致していないと判断されれば、全員を不合格としなければならないが、そうはなっていないのが実態だろう。

「理想型AP」の例として、「教育目標で目指す人材像」を「求める学生像」に定めるケースが挙げられる。この場合、入試において「教育目標で目指す人材像」を持った学生を幸いにも獲得できたとしたら、その後の大学教育では何を育成するのだろうか。入学希望者に求めるものは、あくまで入学後のカリキュラムに適応するために必要な能力や適性等を示すべきであり、「教育目標で目指す人材像」とは分けて考えなければならない。

また、APと実際の選抜方法が整合していないこと(「AP≠Σ選抜方法」)も問題とされてきた。例えば、ある学部のAPが「社会に貢献しようとする積極的な意欲と行動力」を持つとともに、柔軟な思考と豊かな発想力に富む学生を求めています」であったとして、実際の入試が、センター試験

図表3 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」の抜粋

「例えば、当該大学(学部・学科)の教育理念や教育内容をよく理解した上で、より高いレベルでの自己実現を図ろうとする情熱と明確な志望を持った学生や、十分な基礎学力を有し、かつ問題探究心・学習意欲・人間性に優れ、将来研究者となることに熱意と適性を有する学生」

(5教科7科目)と個別学力検査(国語、英語)を実施している場合、「積極的な意欲と行動力」や「豊かな発想力」を入試で評価しているとは言い難い。

「AP≠Σ選抜方法」は、少なくとも2つの問題点をもたらす。1つ目は、「APに沿った入学者の受入」の検証である。周知の通り、『大学機関別認証評価』(大学評価・学位授与機構)の「基準4 学生の受入」では、「入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されていること」が重要な評価指標となっている。こうした検証作業を行う際に、APで示す能力や適性等を評価する入試になっていなければ検証は難しい。2つ目は、受験生や彼らを指導する高校教諭は、実際の出題内容や評価方法をみて、「このような問題を解ける生徒を求めているのか」「このような実績や活動を持っている生徒が欲しいのか」と判断しており、実際の出題内容や評価方法を「実質的なAP」として捉えている。そうなれば、大学が苦勞して作ったAPは「形式的」なものとして認識されているにすぎない。

これは入試制度の仕組みが影響していると考えられる。APに沿った選考を前提にしてきた米国の入試では、高校の成績やエッセイ、SATやACTのスコアといった書類審査が中心である。そのため、それぞれの大学が独自に学力検査等の個別試験を実施することは基本的にない。個別試験がないが故に、求める能力や水準等を具体的に示すAPを定めなければ、志願者が出願の際に混乱してしまうという背景がある。わが国においてAPという概念が一般的でなかった時代に、慶應義塾大学(SFC)で初めてAO入試が導入されたとき、いわゆるAPといえるものを示したのは、同入試を実施するうえで不可欠であったからであろう。一方で、わが国の伝統的な入試制度では、各大学が独自に個別試験を実施し、実際の入試問題や評価手法に対して「これくらいの問題は解いてほしい」「これについては知っていてほしい」といったメッセージを暗に込めることで個別試験が実質的なAPの役割を果たしてきた。このため、改めてAPを示す必要がなかったのではないかと考えられる。しかしながら、高等教育のユニバーサル化に伴い、受験生と大学のマッチングが求められるようになった。実際の入試問題や評価手法だけでメッセージを伝えるだけでなく、ディプロマ・ポリシー

(DP)やカリキュラム・ポリシー(CP)と一体的にAPを示さなければならない。当然のことながら、APの重要性は相対的に高まっており、各大学は、「形式的なAP」から「実質的なAP」への早急な転換が求められている。

② 「実質的なAP」の実現に向けて

「実質的なAP」を検討するために、長崎大学の吉村教授の提案が参考になる^{※1}。同氏は、テストのあるべき姿や規準がまとめられた『テスト・スタンダード』(日本テスト学会編)を踏まえ、テストの基本設計として重要な「測定内容」と「測定形式」について、前者をAP、後者を入試問題(あるいは評価方法)に対応づけたAPの策定を提案している。実際のAPにおいて測定内容の具体的な表現は難しいものの、測定形式を念頭におくことで、選抜方法を定める際の混乱を大きく低減させる効果を持つという。また、この観点からAPの文言を検討することで、「求める学生像」が「育成したい人材像」と同じになるような事態も避けられると主張する。大変参考になる提案だが、実際の現場において、これらの制度設計を既存の入試制度に対して一気に行うのは難しいだろう。昨今、各大学で学部改組が積極的に行われているが、こうした機会を利用して新たなコンセプトのもとAPを策定するのが1つの手段である(吉村氏の報告も新学部に関する事例である)。

一方、APを定める際には、選抜方法との関係において次のような課題も生じる。例えば、入学後の学習に欠かすことのできない適性として「意欲」はとても重要であるが、実際には、受験生の「本物の意欲」を面接試験等によって評価するのは難しい。評価方法を工夫しても、すぐに受験対策によって対応されてしまい意味がないという話はよく耳にする。ここで少し発想を変えてみたい。仮に、「意欲」が入学後の学習において不可欠であるにも拘わらず、入試で評価することが難しいのであれば、入試での評価に執着するのではなく、「意欲」を喚起できるような教育カリキュラムを検討したほうが生産的ではないかということである。そして、同カリキュラムを遂行するうえで、ど

うしても必要な能力や適性等を洗い出し、その中で評価可能なものを入試で評価するという考え方はどうだろうか。現在のAPを再考するとき、入試で評価できないものを教育カリキュラムへシフトすることは、「実質的なAP」に近づくための1つのアプローチとなるだろう。

もう1つAP検討の際に直面する課題に触れたい。各大学には多様な選抜方法が並存する。APと各選抜方法を対応づけようとするとき、APで示す能力や適性等について、一部の入試では評価できるが、他の入試では評価できないという状況が生じる。図表4は架空の大学の入試制度である。選抜方法Aでは、AP①～AP③を評価することができるがAP④については評価できない。一方、選抜方法Cは、AP③とAP④は評価できるものの、AP①とAP②は評価していないことになる。こうした状況を考えたとき、「APとは選抜方法ごとに定めるものなのか」という疑問が生じる。この疑問に対する答えは「否」であろう。ある学位を授与する方針(DP)があって、それを遂行するための教育カリキュラム(CP)があり、学生受入のためのAPが一本で繋がっていることが本質だと考えるからである。

ここで「多様な入試」と「多面的・総合的評価」という観点からAP策定に関する提案をしたい。図表5を見て欲しい。まず、それぞれの選抜方法において誰をターゲットにしているのかをAPの中で明確に定めている大学は、少数に留まるだろう。しかし、多様な背景、経験、能力等を多様性として評価することが求められていることを考えると、各選抜方法においてターゲットを明確に定めることは多様性を

図表4 APと選抜方法の対応

APで示す能力・適性等	選抜方法A	選抜方法B	選抜方法C
AP①: 高校までの基礎的な学力	○	×	×
AP②: ○○を理解するための基本的知識	○	○	×
AP③: ○○するための基礎的な語学力	○	○	○
AP④: ○○に対する意欲	×	○	○

○: 評価している ×: 評価していない

図表5 多様な入試における多面的・総合的評価に向けたAP設定の考え方

選抜方法	対象(ターゲット)	評価方法① AP①	評価方法② AP②	評価方法③ AP③	評価方法④ AP④	評価方法⑤ AP⑤
前期日程	全ての人	50	30	10	10	0
後期日程		80	10	10	0	0
推薦入試	○○の実績を持つ人	20	30	0	20	30
社会人入試	○○の経験を持つ人	0	20	10	50	20
○○入試	○○の背景を持つ人	0	10	20	10	60

数値は各選抜方法における評価の割合(%)を示す(数値はダミー)

意識的に捉えることに繋がる。一方、APとして定める能力や適性等は、「学力の3要素」を含んだ形で評価方法と整合させなければならない。これを踏まえ、縦軸を選抜方法、横軸をAPで求める能力や適性等の要素とすることで、各選抜方法において、どの要素に、どの程度のウエイトを置いて評価するのかを示すことができる。これにより受験生にとってはAPを視覚的に捉えやすくなるだけでなく、選抜方法によっては、任意の要素のウエイトをゼロでもよいとすることで、図表4で示したような問題点も解決される。さらに、「『確かな学力』として求められる三要素を総合的に評価する視点を担保するため、どのような評価方法を活用するのか、学力の三要素全てを評価の対象としつつ、特にどういった要素に比重を置くのかを、大学入学希望者に対して明確に示していくことが求められる」という要請にも応えられるだろう。筆者自身、「多面的な評価」について、どの面をいくつ評価すれば「多面的」といえるのかよく分からない。APで示す各要素を適切な評価手法によって複数面評価することを「多面的な評価」とすれば、少なくとも関係者の共通認識は形成されるだろう。これにより、多面的・総合的な評価を開発するための視点となるだけでなく、選抜方法を検証するための実質的な枠組みになるのではないかと考えている。

③ メッセージとしてのAP

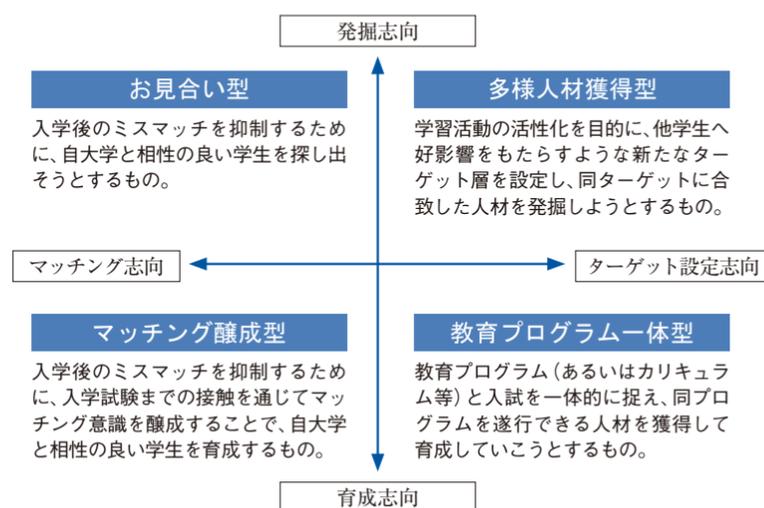
選抜方法と密接に対応し、「実質的なAP」として機能するようになれば、「こんな人材を育てるために、この教育カリキュラムを準備しているから、これらの能力と適性を持っている学生に来てほしい。だから入試ではこのように評価します」といった受験生へのメッセージとなる。実際の入学者の入学後の適応状況等も併せて発信すれば、大きな相乗効果が期待されるだろう。AO入試がまだ珍しい時期、「面接にしても小論文にしても基準が分からないために大学の求める学生像が見えてこない」と高校現場から指摘されていたようである。この指摘は、実際の入試にAPの要素をどれだけ落とし込むことができるかがメッセージとしての効果を左右することを示

唆する。「どのようなメッセージをAPに込めるか」。各大学の手腕が問われる。

進化する「AO型入試」

世間の注目を集めている東京大学の推薦入試、京都大学の特色入試だけでなく、他の大学においても国際バカロレアを活用した入試や様々な工夫を凝らした先進的な入試が動き始めている。前述のように、これからの大学入試改革は、AO入試のような特定の選抜区分を拡大することが主旨ではない。「学力の3要素」を多面的・総合的に評価を試みる入試であれば、AO入試でも推薦入試でも構わないという考え方である。その意味で、AO入試や推薦入試といった選抜区分が持つ意味は、誰(何)をターゲットとするかという多様な人材確保の手段としての違いに留まるかもしれない。従って、従来の学力検査を中心とした一般入試とは異なる側面から、志願者の能力や資質等を多面的・総合的に評価しようとする入試を「AO型入試」と呼ぶ。各大学の先進的な入試改革を踏まえて「AO型入試」を類型化すると図表6のようになる。横軸が「目的」、縦軸が「アプローチ」とすることで、4つのタイプに分けられるが、各大学の置かれている状況や立場、戦略によって、どのタイプに該当するかは大きく異なることが考えられる。この類型に全てのAO型入試が当てはまるとは限らないが、何を目的として、どのようなアプローチをとるのかという視点からAO型入試を捉えることで、その位置

図表6 AO型入試の類型



づけを検討する1つの枠組みとなるだろう。

「AO型入試」への期待感と課題

伝統的ともいえる知識伝授の講義形式を中心とする場合、一般的な教科・科目の学力検査によって知識ベースの基礎学力のバラつきが少ない集団を選抜するほうが効果的な教育活動を行えるという考え方もある。しかし、高等学校教育と大学教育は、教員による一方向的な講義形式から、学習者の能動的な学習への参加を取り入れたアクティブ・ラーニングへと教育のあり方が変わろうとしている。教育のあり方が変われば、それにふさわしい学生の選び方も変わるはずである。

来年度から国による財政支援を受け、各大学の入試改革はさらに加速する。従来のノウハウを発展させたものだけでなく、全く新しいタイプの入試も生まれるかもしれない。ただし、目新しさだけを求めるようなAO型入試の拡大は避けなければならない。改革の本質は、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な教育改革である。入試のみに焦点を絞った改革は、本質的な改革とはいえない。

筆者が期待する1つの形は、教育カリキュラムと連動したAO型入試の浸透である。確かに少数の個性あふれる学生を見つけ出し、既存の入試で入ってきた学生に刺激を与えることを期待する入試のあり方も重要ではあるが、相応のコストをかけて選考した学生が、入学後にその能力を活かせない環境で学ぶことで平準化してしまうことも十分に考えられる。であれば、AO型入試で入学した学生が、その能力を最大限に活かせるような入学後の仕組みを構築することが必要である。本来、教育のあり方があって、それにふさわしい学生を求めるのが筋だろうが、まずはAO型入試のあり方をきっかけとして大学教育改革への波及を期待したい。

AO型入試によって新たな受験者層創出を狙うのは1つの戦略である。それと同時に受験生の学習行動・学習経験をどのように変えるかという点も意識したい。入試で問われなければ、高校では学習しないと言われることがあるが、AO型入試でこそ、大学で学ぶために重要だと思われる学習活動や学習経験を喚起するような仕組みが実現できる

のではないだろうか。いわば入試を教育機会と捉えた「受験対策前提」の入試制度設計である。

具体例として、筆者の所属する佐賀大学の事例を紹介したい。佐賀大学では入試改革の柱の1つとして「佐賀大学版CBT」を検討している。いわゆる「CBT(Computer Based Testing)」ではなく、ペーパーテストでは技術的に評価することが難しい領域をタブレット等のデジタル技術を用いて評価しようという試みである。現在は「化学」を題材に、実験活動等を積極的に行うことが問題を解くうえで有利になるような出題内容を検討している。

もう1つの柱は高大連携活動である。教師を目指す県内の高校生を対象に「高校3年間と大学4年間で教師を育む」ことを目的とした「継続・育成型カリキュラム」を開発した。参加者は、1年次から年3回程度来学し、講話や大学の講義、大学生との交流といったメニューの中でアクティブ・ラーニングを中心とした教育活動を行う。そして、最終的にポートフォリオを仕上げた者には大学から修了証を発行する。これらの成果は、佐賀大学に限らず他大学の入試でも積極的にアピールすることを推進しており、高大連携活動の活性化も視野に入れた改革モデルを目指している。

最後に、AO型入試が乗り越えるべき課題に触れておく。選抜性の高い大学では、受験生にとって合否結果を受け入れやすい学力検査を中心とした一般入試の割合が大半を占めている。しかし、一般入試の割合が減りAO型入試の割合が大半を占めるようになれば、受験生の「納得性」をどう高めるかという課題に直面する。不合格になっても「学力不足」と納得しやすい学力検査と違い、多面的・総合的な評価には相応の説明が求められる。その説明として最も重要となるのは、APに沿った人材を公正に評価しているという「入試の妥当性」を示すことである。これを説明するには入学者の追跡調査、選抜方法の検証、合格発表後の成績情報開示のあり方の検討等、アドミッション機能の強化は欠かせない。妥当性を説明できなければ、その入試制度は存在意義を失うのである。「多様な方法で『公正』に評価するという理念」(高大接続答申)をどのように実現するのか。各大学の挑戦的な改革を期待したい。

※1 「アドミッション・ポリシーに基づく個別大学の入試設計のあり方について」【平成27年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第10回)】研究発表予稿集

大学の個別入試に関する最近の改革の例

本誌184号「入試制度に関する学長調査(2013年実施)」にて「学習意欲の高い学生を獲得するための独自入試を行う予定または検討中」と回答した大学を中心に、各大学のホームページや個別取材から、2013年以降に新たに導入された多面的・総合的評価を行う入試をまとめ、編集部にて作成した。

設置	大学	入試名称	入試種類	実施開始年度	入試定員(総定員に対する比率)	対象学部	入試設置目的・求める学生像(AP)			具体的選考方法	評価方法							
											書類等	学力試験	グループワーク・ディスカッション	レポート・小論文	プレゼン・面接	外部試験	その他	
国立	宇都宮大学	アドミッション・オフィス入試試験(AO入試)	AO	2016	16(2%)	地域デザイン科	学科により定義			コミュニティデザイン学科:第一次選考 調査書、活動経験についての報告書、進学後の自己設計書等→第二次選考 プレゼンテーション、面接、グループディスカッション、センター試験 建築都市デザイン学科:第一次選考 調査書、活動経験についての報告書など →第二次選考 プレゼンテーション、面接、実技、センター試験 社会基盤デザイン学科:第一次選考 調査書、地域社会貢献活動経験についての報告書等 →第二次選考 プレゼンテーション、面接	各学科共通:入学志願書、推薦書、調査書 ・コミュニティデザイン学科:活動経験についての報告書、進学後の自己設計書 ・建築都市デザイン学科:活動経験についての報告書、活動経験が判断できる書類 ・社会基盤デザイン学科:地域社会貢献活動経験についての報告書	センター ※社会基盤デザイン学科以外	○ ※コミュニティデザイン学科のみ	×	○	×	実技 ※建築都市デザイン学科のみ	
国立	お茶の水女子大学	新フンボルト入試	AO	2016	20(4%)	文・教育・理・生活科	「グローバルに活躍できるリーダーの育成」 ・リーダー・研究者となるための「のびしろ」(ポテンシャル)のある学生の選抜			①プレゼミナール…2日間、文理複数科目の講義・演習を受講後レポート作成 ②一次選考…書類選考(プレゼミナールで作成したレポート・志望理由書・活動報告書・外部外国語試験(TOEFL®等)) ③二次選考…2日間、文・理に分かれて実施 文系:図書館入試 1日目…附属図書館で図書を自由に参照しつつ課題についてのレポート作成 2日目…グループ討議・面接 理系:実験室入試 【理学部数学科、物理学科、化学科、情報科学科】 思考力や探求力等を見る専門性のある試験課題を課す(例:実験、実験演示や実験データをもとにして考察する) 【理学部生物学科、生活科学部食物栄養学科、人間・環境科学科】 自主研究課題のポスター発表を課す	図書館入試 実験室入試 センター(合格者に義務づけるが合格判定とは無関係)	○	○	○	○	×		
国立	電気通信大学	推薦入試「UECパスポートプログラム」	推薦	2013	5(1%)	情報理工学域Ⅲ類(理工系)	・科学者、技術者としての専門的な研究・開発能力と同時に重要となる、分野を異にする人々との意見交換と自らの目指すものを説明できる討論・発表能力を重点的に養成する			面接試験及び提出書類を総合的に評価 ・面接試験は個人面接、志望動機・勉強意欲等に関する質問に加え、「高等学校等での理科に関する研究活動等」について自ら作成したポスターによる発表と質疑応答を行う ・物理・化学・数学・情報分野等における国際オリンピック等の課題解答方式国際コンクールの日本代表選考会、ならびに全国規模の自由研究方式コンクールにおける実績を総合判定において評価	調査書・推薦書・志望理由書	×	×	×	○	×	×	
国立	東京大学	推薦入試	推薦	2016	100程度(3%)	法・経済・文・教育・教養・工・理・農・薬・医(医学科・健康総合科学科)	【世界的視野をもった市民的エリートの育成】(東京大学憲章) 【求める学生像】 ・教育研究環境を積極的に最大限活用して、自ら主体的に学び、各分野で創造的役割を果たす人間へと成長していこうとする意志を持った学生 ・総合的な教育課程に適合する学力を有しつつ、本学で教育・研究が行われている特定分野や活動に関する卓越した能力、もしくは極めて強い関心や学ぶ意欲を持つ志願者 【入試設置目的】 ・学部学生の多様性を促進し、それによって学部教育の更なる活性化を図ることに主眼を置くと同時に、生徒の潜在的能力の発掘を含む日本の中等教育における先進的取組を積極的に評価し、高等学校等との連携を重視することを目的として、推薦入試を導入する。			提出書類・資料、面接等、及び大学入試センター試験の成績を総合的に評価 ①提出書類・資料で第1次選考を行い、第1次選考合格者に対して学部ごとに面接等の第2次選考を実施 ②提出書類・資料、面接等、及び大学入試センター試験の成績を総合的に評価したうえで、最終合格者を決定 ※センター試験は概ね8割以上の得点が目安(医学部医学科・医学部健康総合科学科は780点程度)	・大学共通 入学志願書、調査書、志望理由書、学校長推薦書 ・学部個別の必要書類 学習状況調査票、その他	センター	学部による	学部による	学部による	学部による	学部による	×
国立	京都大学	特色入試	AO、推薦、一般(後期)	2016	108+若干名(4%)	総合人間・文・教育・法・経済・理・医・薬・工・農	【入試設置目的】 ・研究型大学として京大が重視する「自ら課題を発見し、チャレンジする」という自発的・能動的学びのポテンシャルがある人材を登用する。 ・高校教育から大学教育への接続を図り、一体的に人材育成を進めるため、高等学校と大学との接続・連携を緊密なものとする「高大接続型」の入学者選抜により、多様な人材を求める。 【求める人物像】学部により定義			高大接続と、個々の学部の教育を受ける基礎学力を重視し、 ①高等学校での学修における行動と成果の判定…調査書、学業活動報告書、学びの設計書等 ②個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定…センター、小論文、面接等を行い、高等学校段階までに育成されている学ぶ力と、学部の教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価	調査書、学業活動報告書(または推薦書)、学びの設計書を基本とするが、学部によって提出書類が若干異なる	センター(医学部医学科以外)能力測定調査、小論文等	学部による	学部・学科による	学部・学科による	TOEFL-iBT® ※医学部医学科、薬学部	学部・学科による	
国立	京都工芸繊維大学	ダビンチ入試地域創生Tech Program	AO	2016 ※学部全体では2006年度より	20(3%)	工芸科(地域創生Tech Program)	・「知と美の融合」の象徴であるイタリアのレオナルド・ダ・ビンチに因み、大学が求める資質“知性と感性”を問う ・ものづくりを通して地域創生に貢献する意欲を持ち、科学技術、人間・社会・文化に対する広範な関心と、客観的な判断力、論理的説明力を有する人材 ※地域創生Tech Programにはバイオ・材料化学コース(応用生物学課程・応用化学系)、メカトロニクス設計コース(電子システム工学課程・情報工学課程・機械工学課程・デザイン経営工学課程)、デザイン・建築コース(デザイン・建築学課程)の3コースがあり、出願時にコース・課程系を選択する(通常の課程系への変更は不可)			1次選考…書類選考(出願書類)・スクーリングの総合評価 最終選考…課程別スクーリングの結果により評価 ※スクーリングとは…講義や課題提示を受けてのレポート作成や、グループディスカッション、課題提示を受けてのプレゼンテーション等のプログラム。課程ごとのアドミッションポリシーに従って実施されており、入試そのものが体験入学のようなプログラムになっている。	中学生以降の活動記録、志望理由書、調査書等	×	コース・課程系による	コース・課程系による	コース・課程系による	×	×	
国立	大阪大学	世界適塾入試	AO、推薦※学部により異なる	2017	270(10%)	全学部	・2031年の創立100周年において、「世界適塾」として世界トップ10の研究型総合大学になることを目指すため、それを担うことができる人材 ・高等学校等における学修を通して、確かな基礎学力及び主体的に学ぶ態度を身につけ、自ら課題を発見し探求しようとする意欲にあふれる人			・世界適塾AO入試、世界適塾推薦入試、世界適塾科学オリンピックAO入試の3種類 ・高等学校の成績、大学入試センター試験の結果、国際バカロレア資格、TOEFL®、口頭試問(面接)等を各学部のアドミッション・ポリシーに基づき組み合わせるほか、必要に応じ、高等学校での自由研究の活動、海外留学等の実績等を活用したり、志望理由書や志願者が所属する高等学校等の長が作成する志願者評価書を参考にしたりする等して、多面的・総合的に合格者を判定	調査書、志望理由書、志願者評価書等 ※学部・方式により異なる	○	×	○	○	○	×	

設置	大学	入試名称	入試種類	実施開始年度	入試定員(総定員に対する比率)	対象学部	入試設置目的・求める学生像(AP)		具体的選考方法	評価方法						
										書類等	学力試験	グループワーク・ディスカッション	レポート・小論文	プレゼン・面接	外部試験	その他
国立	島根大学	地域貢献人材育成入試	AO,推薦,一般(前期) ※学部により異なる	2015	54 (5%)	法文・教育・医・総合理工・生物資源科 ※医学部以外は2016年度入試より実施	・自然、社会とその歴史、学術文化、人間への理解を深めようとする知的好奇心が旺盛な人 ・人と社会へのつながりを大切に、専門的力量を高めようとする人 ・地域及び現代社会の諸課題に目を向け、積極的に関わろうとする人 ・高等学校段階の基礎的な学力を十分に身につけ、入学する学部・学科で必要とする教科・科目で優れた学力を有する人 ※さらに学部により詳細に定義		法文学部:一次試験 書類選考 → 二次試験 小論文(模擬授業を含む)・面接 → センター試験 教育学部:小論文・プレゼンテーション・面接 → センター試験 総合理工学部:小論文・面接 生物資源科学部:一次試験 書類選考 → 二次試験 小論文・プレゼンテーション 医学部医学科:数学・英語・自然科学総合問題・小論文・面接・センター試験等 ※方式により異なる 医学部看護学科:小論文・面接→センター試験	調査書、志望理由書、プレゼンテーション用資料、自己推薦書等 ※学部・方式により異なる	○ ※医学部医学科	×	○	○	×	×
国立	徳島大学	推薦I「地方創生型」	推薦	2016	8 一般枠4、 地域枠4 (0.6%)	生物資源産業	地域産業界と結びつきの強い専門教育を行っている学部を対象とし、地方創生に意欲を持つ学生の受入を目的とする。(地域枠あり) 求める人物像: 1. 関心・意欲・態度:バイオテクノロジー、生命、医療、食料、農業、環境に強い関心と学びに対する意欲があり、自分で明確な目標を持っている人 2. 探究力:自分が関心を持ったことを深く掘り下げようとする人 3. 表現力:自分が伝えたいことを相手に表現できる人 4. 知識・教養:本学部の専門分野を学ぶために、高等学校で身につける文系系・理系系にわたる基礎的な知識・教養を持つ人 5. 思考・判断力:今までの知識・教養をもとに思考を深めて適切に判断できる人 6. 協働力:問題解決のために、国籍や世代、考え方にとらわれないことなく、対等の立場で協力できる人		第1次選考及び第2次選考の結果を総合して判定。 【第1次選考】・書類選考:調査書、志望動機書、学びの設計書(大学・社会人までを繋ぐ設計書を作成。自分がこれから学びたい分野の理由を含めて、3~400字で簡潔に作成して提出) 【第2次選考】・集団討論:試験準備室でテーマの提示(バイオテクノロジー、食料、農業関連)説明ののち、15分間で自分の見解をまとめ、試験室で最大20分間の討論を行う。 ・個人面接:志望動機・志望理由、提出書類等の確認等を中心に10-15分程度。高校の基礎学力「化学基礎」を確認するため口頭試験を行う。	調査書、志望動機書、学びの設計書	×	○	×	○	×	×
		推薦II「人物重視型」	推薦	2016	22 (1.7%)	生物資源産業	高等学校段階における多様な能力、関心等を重視し、それを表現できる人を総合的に選抜する。 求める人物像:同上		第1次選考及び第2次選考の結果を総合して判定。 【第1次選考】・書類選考:調査書、志望動機書、学びの設計書(同上) ・大学入試センター試験の成績 【第2次選考】・集団討論:同上 ・集団面接:志望動機・志望理由を中心に20-30分程度。提出書類の確認をする場合がある。	調査書、志望動機書、学びの設計書	センター	○	×	○	×	×
国立	愛媛大学	アドミッション・オフィス(AO)入試I	AO	2016	52 (3%)	社会共創	(1)入学者受入方針<アドミッション・ポリシー> (2)卒業時に到達する能力<ディプロマ・ポリシー> (3)卒業後の進路を学科により定義		総合問題、グループディスカッション、面接の結果及び提出された出願書類(活動報告書、志望理由書、調査書)の内容から、アドミッション・オフィス方式(総合評価方式)により、志願者の意欲・能力・適性・関心等を多面的、総合的に評価	活動報告書、志望理由書、調査書	×	○	×	○	×	総合問題
国立	高知大学	AO入試I	AO	2015	26 (3%)	人文社会科、農学海洋科、地域協働	・入試の考え方 学力試験は課さず、該当学部・学科・コースで学ぶ関心・意欲・態度に重点を置いて、思考・判断、技能・表現も評価し、それぞれの学部が重視しているゼミナール活動等への適合性を総合的に判断する ・アドミッション・ポリシー 学部により定義		人文社会科学部:第1次選抜 志願票、調査書及び講義理解力試験の成績 → 第2次選抜 セミナール形式の授業(少人数のグループで討論したり一定の課題を考えたりする授業)に関する適性試験とそれを踏まえた作文及び面接試験 農学海洋科学部:第1次選抜 授業(講義、演習、実習を含む)理解力テスト、志望理由書及び調査書 → 第2次選抜 面接 地域協働学部:第1次選抜 志願票、調査書及び講義理解力試験の成績 → 第2次選抜 セミナール形式の活動(少人数のグループで討論したり一定の課題を考えたりする活動)に関する適性試験とそれを踏まえた活動振り返り作文及び面接試験	志願票、志望理由書、調査書等	×	○	○	○	×	○ 講義理解力試験
		推薦入試I	推薦	2015	10 (1%)	地域協働	・入試の考え方 当学部の実習とゼミナールを重視した教育課程で学ぶためには、集团的行動、集团的学習や、学外の「おとな社会」とのコミュニケーションに適合する資質を持っていることが必要。そのため、意欲・関心・適性、技能、表現を重視した入学者選抜を行う。 ・アドミッション・ポリシー 地域理解力、企画立案力、協働実践力という3つの知識・能力を統合した地域協働マネジメント力を持った人材を養成するために求められる資質を、以下の5つの観点で定義 ①思考・判断 ②関心・意欲・態度 ③知識・理解 ④技能・表現 ⑤教科外活動		以下の結果を総合して決定 ・グループ活動及び振り返り演習適性試験:短時間のグループ活動を行い、それを踏まえて、グループ内の運営やメンバーの果たした役割に関する成果と課題等についての振り返りを実施。チームとしての成果を向上させる資質という視点から、受験者の「ふるまい」について試験官が観察し採点を行う ・作文:グループワークの内容、運営、自己と他者の役割等に関する振り返りを文章にする ・個人面接:教科外活動「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」の4つの重点評価項目について、複数の採点者が評価 ・調査書、推薦書及び志望理由書	調査書、推薦書、志望理由書	×	○	○	○	×	×
国立	九州大学	AO入試II	AO	2015	10 (0.4%)	法	【入試設置目的】 ・新たに立ち上げたGlobalVantage (GV) プログラム(法学部と英語大学院(LLM.)の一貫教育で、高度な専門知識と国際交渉力を持った人材を養成するコース)にふさわしい学生の選抜 【求める人物像】 ・法律の専門家として国際的な場で活躍するための語学力と法的知識を修得する強い意欲を持つ学生		・第1次選抜:書類審査(調査書または調査書に代わる書類、志望理由書及び英語能力試験※の成績)※TOEFL PBT®、TOEFL iBT®, GTEC for Students, GTEC CBT, TOEIC®, 実用英語技能検定試験、IELTSのいずれか ・第2次選抜:英語学力試験(日本語小論文を含む)、個人面接及びセンター試験の総合評価により選抜	調査書または調査書に代わる書類、志望理由書および英語能力試験の成績	○ センター	×	○	○	○	×
国立	佐賀大学	AO入試	AO	2016	21 (2%)	芸術地域デザイン	コースにより定義		以下の結果を総合して決定 ・書類審査:調査書、志望理由書、ポートフォリオ(活動実績ファイル・志願者自身が制作した作品や活動実績等についてまとめたもの[芸術表現コースのみ]) ・小論文[地域デザインコースのみ] ・適性検査:模擬授業、プレゼンテーション、試問 ・特色加点:志願者が主に高校時代に主体的に取り組んできた活動や実績を任意で3件まで申請可能。アドミッション・ポリシーに応じて、当初配点とは別に100点を上限に加点を行う[地域デザインコースのみ]	共通:調査書、志望理由書 地域デザインコースのみ:特色加点申請書※任意 芸術表現コースのみ:ポートフォリオ(活動実績ファイル)	×	×	○ ※地域デザインコースのみ	○	×	○ 適性検査(模擬授業・試問)

設置	大学	入試名称	入試種類	実施開始年度	入試定員(総定員に対する比率)	対象学部	入試設置目的・求める学生像(AP)		具体的選考方法	評価方法						
										書類等	学力試験	グループワーク・ディスカッション	レポート・小論文	プレゼン・面接	外部試験	その他
国立	長崎大学	一般入試(前期日程) 批判的・論理的思考力テスト(総合問題)	一般	2014	68 (4%)	多文化社会	多文化社会学部の教育目標 グローバル化に伴い複数の文化の共生と協働が求められる現代世界において国際的に活躍できる人文社会系グローバル人材を育成することを教育理念とし、具体的には、 ①高度の英語力を有し、グローバル化する世界において、英語でコミュニケーションやプレゼンテーションができる、 ②グローバル化する世界における多文化状況に関する知識を有し、文化的多様性の意義を理解できる、 ③グローバル化する世界の中で、人々と共生的な関係を築き、問題解決に向けて、パートナーシップやリーダーシップを発揮して行動することができる、人材の育成を教育目標とする 求める学生像 (1)英語を主とする外国語の運用能力の基礎が充実している者 (2)世界の多文化状況や異文化交流に興味・関心を持ち、グローバルな視点で自ら学ぼうとする意欲のある者 (3)世界の多文化状況を客観的に捉え、見いだされた課題の解決に向けて論理的に思考できる素養を持つ者 (4)世界規模の多種多様な考え方や価値観を尊重しつつ、それらについて批判的に思考できる素養を持つ者		センター試験+外国語(英語)+総合問題(批判的・論理的思考力テスト)+面接(オランダ特別コース受験者のみ) ※センター試験…TOEFL iBT®61点以上、TOEFL PBT®500点以上、TOEFL® Junior Comprehensive341点以上、TOEIC®730点以上、実用英語技能検定(英検)準1級以上、IELTS5.5以上、GTEC forSTUDENTS700点以上または GTEC CBT1040点以上のいずれかのスコア・級を有する者 で出願時に申請したものは、大学入試センター試験の外国語の得点を満点として取り扱い第1段階選抜の合格者とする。 ※総合問題…このテストでは、文章・グラフ・地図・図表等を読み解き持論・解釈を展開するため、以下の能力を総動員することが必要となる ①国語の授業で身につける読解力、思考力、文章力 ②地歴・公民の授業で身につける歴史の流れ・因果関係 ③「この地域はこんな地域」という地理的イメージ力 ④現代社会の仕組みや他者に対する倫理 ⑤数学や理科の学習を通して養われる数理的に物事を判断する力や論理的に推論する力 等	×	○	×	×	○ (オランダ特別コース受験者のみ)	○ (英語の外部検定試験のスコア要件を満たす場合は、センター試験の外国語の得点を満点として取り扱う)	×
私立	国際基督教大学	一般入試	一般	2015	A方式 290 B方式 10 (48%)	教養	・文系・理系にとらわれない広い領域への知的好奇心と創造力 ・的確な判断力と論理的で批判的な思考力 ・多様な文化との対話ができるグローバルなコミュニケーション能力 ・主体的に問題を発見し、果敢に問題を解決してゆく強靱な精神力と実行力 日本あるいは世界各国の教育制度で、文系・理系にとらわれず幅広く学び、各教科・科目の基礎知識を関連づけて行動する知性へと変革する能力や外国語によるコミュニケーション能力を備えていることを重視		A方式:1.「人文・社会科学」または「自然科学」 2.総合教養(リスニングを含む) 3.英語(リスニングを含む) B方式:1.英語(IELTSまたはTOEFL®の公式スコア) 2.総合教養(リスニングを含む) 3.個別面接 ※総合教養…特定テーマについての講義を聴き、内容及び関連する小論文等に関する設問	A方式・B方式共通:願書、調査書 B方式のみ:英語能力を証明する書類	○	×	×	○ (B方式)	IELTS、TOEFL® (B方式)	○ 総合教養
私立	東京農業大学	榎本武揚フロンティア入試	自己推薦	2016	20 (5%)	生物産業	・東京農業大学・建学の祖、榎本武揚先生のチャレンジ精神やフロンティアスピリットに共鳴する学生を広く募集する。 ・グローバル化が進む社会に生きつつ他方でのローカル化を考える、即ち国際的な視点に立って地域活性化の実現を目指す受験生 ・生物産業学部は食料自給や環境保全等人類共通の課題に興味を持ち、問題解決に向けて意欲的にチャレンジし、生物産業の発展に寄与するとともに、広く社会に貢献できる人を求めている。 (1)教育目標の下で、生物産業学を修める意欲のある人。 (2)高校卒業程度の基礎学力を確実に修得している人。 (3)健全な人間関係の構築を可能にするコミュニケーション能力を有する人。 (4)地域や社会に貢献しようとする強い意志、広い視野、明確な問題意識を有する人。		エントリーシート提出(この時点では検定料不要)→書類選考・合格発表→出願→1次選考(小論文・グループ面接)→2次選考(プレゼンテーション・面接)	エントリーシート ※主な記載事項 ・志望学科(第1～第3希望) ・榎本武揚フロンティア入試を受験した理由 ・冒険をしたエピソード ・入学後に学びたい内容と卒業後の進路	×	×	○	○	×	×
私立	武蔵野大学	武蔵野BASIS育成型入試	その他	2014	74 (4%)	法・経済・文・人間科学	・新しいことにチャレンジする気概のある者 ・講義・課題・グループワークを経て、知識技能を活用し、自ら課題を発見し、その解決に向けて探求し、成果等を表現する力を持つ者 ・主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する意欲の高い者		オープンキャンパス申込→オープンキャンパス参加(模擬授業受講)→1次審査申込(課題提出)→1次審査(課題、志望理由書、調査書)→グループワーク→出願可否通知(グループワーク・提出書類をもとに行う)→出願	課題(エントリーシート)、調査書、志望理由書	×	○	×	×	×	×
私立	藤田保健衛生大学	アセンブリ入試	AO	2015	14 (1%)	医療科	次代を担う「良き医療人」の育成 <知識・理解・思考・判断> 1.入学後の修学に必要な基礎学力と学ぶ力を有している。 <態度・興味・関心・意欲> 2.生命に対する健全な倫理観を持ち、弱者に対する奉仕と思いやりの精神を持っている。 3.保健医療福祉に対する関心が高く、この分野に貢献したいという目的意識を持っている。 4.生涯にわたり自己啓発・自己学習を継続する意欲を持っている。 <技能・表現> 5.誠実さと協調性を持って他者と接することができる。 6.自分の考えや行動に責任を持ち、それを相手に明確に示すことができる。 以上の素養を、一般入試、センター利用入試、センタープラス入試については、各選抜試験で上記1について評価し、調査書で上記2～6について評価。アセンブリ入試では上記1～6の全てについて評価。		一次試験:国際適性試験(英語力)…英文問題 二次試験:科学適性試験(理科系能力)+グループディスカッション(6学科混合)	調査書+アクティブレポート(高校3年間の部活動・生徒会活動・ボランティア活動等諸活動の内容を盛り込み、自己アピールとなるレポートを自筆にて作成)	○	○	×	×	○	×
私立	追手門学院大学	アサーティブ入試	その他	2014	111 (7%)	経済・経営・地域創造・社会・心理・国際教養	求める学生像(AP):各学部ごとによる 入試設置目的:アサーティブプログラムの成果を発揮できる入学試験として設置 ※アサーティブプログラムは、大学で学ぶ姿勢や意欲を育てるために取り入れた大学教育への接続プログラム		1次試験:グループディスカッション→2次試験:基礎学力適性検査および個別面接 出願は、アサーティブガイダンスに参加及び少なくとも個別面談を1回受講した者とする。	[A日程] 在学証明書、調査書、志望理由書、個別面談証明書(ガイダンス・個別面談参加者に配布) [B日程] 調査書、志望理由書、個別面談証明書(ガイダンス・個別面談参加者に配布)	×	○	×	○	×	○ 基礎学力適性検査
私立	関西学院大学	グローバル入学試験	その他	2014	159 (3%)	神・文・社会・法・経済・商・人間福祉・国際・教育・総合政策・理工	・「実践力のある世界市民」の育成		I 国際貢献活動を志す者のための入学試験 選考:書類審査+日本語および英語による口頭試問・適性面接審査+面接 II 英語能力・国際交流経験を有する者を対象とした入学試験 選考:書類審査+筆記審査(英語題材論述方式・日本語小論文)+面接 III インターナショナル・バカロレア入学試験(インターナショナル・バカロレアDPのフルディプロマを取得済の者、もしくは取得見込でIB Predicted Scoreが出願時に26ポイント以上である者) 選考:書類審査+筆記審査(英語題材論述方式・日本語小論文)+面接 IV グローバルキャリアを志す者のための入学試験(総合政策学部のみ20名対象) 選考:筆記審査(英語エッセイ・90分・2題)+書類審査・面接 V グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験(理工学部のみ若干名対象) 選考:書類審査+筆記審査(英語・数学・理科)+面接(口頭試問)	調査書、志望理由書、資料説明表等 ※学部・方式により異なる	○	×	○	○	○	×